

第 57 回 歴史リレー講座「柳澤香山侯の暮らし—宴遊日記—（後編）」 岡本 彰夫氏（R1.6.16）

昨年の前編講座でもお話したように、自身の顔色一つで家臣を切腹に追い込んでしまいかねない大名君主にとって、喜怒哀楽を面に出さないことが日頃の生活に欠かせないことでした。そんな君主と家臣の温かな関係性を垣間見ることのできる史料が、柳澤吉保の孫、伊信このぶまたの名を信鴻のぶとみ（香山は諡おくりな）の認めた『宴遊日記』（柳澤文庫蔵）です。今回は、その中で描かれる情愛の風景や人々の心の襞を、各武家の系譜を記録した『寛政重修諸家譜』（1812）による柳澤家の歴史とともにお話します。

ご存じの通り、柳澤吉保は小説やドラマなどで悪役として扱われがちですが、実際は 5 代将軍綱吉を全面的に支えた腹臣中の腹臣です。綱吉は従来の武闘派から文化や芸術で国を治める文治国家への政策に 180 度舵を切り直した将軍。彼らが中心となって元禄という時代を動かし、日本を現在の文化国家へと導いてくれたのです。

吉保の父安忠の石高ははずか 160 石でしたが、吉保の時代には上総の国を与えられて 2030 石に膨らみ、その後はとんとん拍子に 3 万石へと出世を遂げました。将軍綱吉も土産を携え、吉保の家を幾度も訪れています。その際、勉強家の綱吉は家臣を前に儒学の講義も行うほどでした。そのせいか、「吉保の子吉里は綱吉のご落胤」という噂が大正の頃から流れましたが、全くのデマです。軽輩の身から大大名にまで登りつめた吉保は他大名からひどく妬まれたため、こんな風説が広まったのでしょう。実子に恵まれなかった綱吉は家光の孫家宣を跡継ぎに迎えています。実子が誕生していれば吉保に押しつけるはずがありません。

元禄 7 年（1694）、吉保 36 歳のとき石高は 7 万石を超え、武蔵国の川越城主となり名君とうたわれました。同 14 年、綱吉は吉保親子に「松平」の苗字を与えます。翌年になって山辺、葛上、高市などの領地を吉保が手にしたことから大和との関係が始まりました。宝永 6 年（1709）に吉里は家督を継ぎ、特別に甲斐の国を与えられました。ところが享保 3 年（1718）、先代の家臣を排除するかのように 6 代将軍家宣は縁のある大和への国替えを命じ、吉里は郡山藩主におさまります。

さて、『宴遊日記』が書かれたのは安永 2 年（1773）から天明 5 年（1785）までの 13 年間。吉里の息子信鴻が江戸城での辛い務めを終え、最愛の側室お隆りゅうさんと暮らした駒込の別邸（六義園）での日々が綴られています。信鴻は歌舞伎や俳句にも造詣が深く自宅で芝居を上演させたほどで、再就職の面接に訪れた「無芸」な女性を会いもせず帰したとあります。信仰心も篤く、浅草へはお隆さんたちとともに足しげく通いました。

また、夕涼みに出掛けた際に茶屋で犬を抱かせてもらうお隆さんの姿や、土手で見知らぬ老人に煙草の火を気軽に貸したこと、町人夫婦の大喧嘩に出くわし目を丸くしたこと、買い求めた鰻を川に逃がしてやったこと、松尾芭蕉の手紙の真贋鑑定などが『宴遊日記』に生き生きと書かれています。なかでも、六義園を訪ね来た元女中と幼子が夕暮れどきに帰っていく後ろ姿を描いたくだりは、誠に情緒豊かです。ほかにも、煙管売りで祖父母を養う子どもから煙管を買ったり、幼女に飴を与えたりと微笑ましいエピソードも多く見られます。

そして、愛してやまないお隆さん亡きあとは彼女の菩提を弔うため失意のうちに出家します。その後は『松鶴日記』を寛政 4 年（1792）、69 歳で亡くなるまでの 6 年間に渡って書き続けました。恐らく最後の最後までお隆さん一筋だったと思われます。

私はある先生から「歴史は心と情感で読まねばならない。人間同士の営みや温かな心のやり取りを感じ入ってこそ、生きた歴史を学ぶことができる」と教わりました。その証拠に、平安時代から神に関する行事は心の清らかな幼子が執り行うと決まっています。純粋な想いは必ず神に通じます。悲しいかな損得や善悪の感情が真っ先に支配する今の世の中だからこそ、歴史も感情を大切に細やかな心で読み解かねばならない。『宴遊日記』は私のそんな想いをいっそう強くしてくれます。